

うきたむ

第18号

2001.11.3

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL0238-52-2585

FAX0238-52-4665



▲9月9日の縄文まつり

勉強だけじゃない 感じる考古資料館

考古資料館職員 小林 貴 宏

考古学の研究が飛躍的に進展した20世紀を越えて、更なる新発見や研究の進展と共に、それら学問が一人一人の学習活動や文化芸術活動に活かされることによって、真に市民のものとなるべき時代が来たように思います。

現在、市民に広がる裾野の勢いは、「学問」「勉強」としての「考古学」に留まらず、音楽や舞踊、写真や絵画、文学と言った、「芸術活動の道具」として「考古学」を活用することに及んでいます。

アマ・プロの専門家が学問として遺跡・資料を見ることと併せて、市民がその人なりの感覚でそれらを見ることは、両輪でなくてはなりません。前者だけでは面白味もないが、後者だけの勝手でも裏付けがないのはいかがわしい。それをキャッチボールをして、みんなで歴史を学び、歴史の夢を語り、歴史と対話する。そこには、未来を切り開く力、過去を見つめる確かな眼、それと人生を豊かにしてくれる楽しみを見出すことができると思います。

ローマの言葉に「後ろ向きで進む」という言葉があります。歴史を学びつつ、転ばないように慎重に進む、という意味です。未来へ進む慎重な深さは、遺跡を巡り、実物を見て、体験する、そして何より歴史の重さを自分で感じることでこそ身につくものではないでしょうか。

勉強だけじゃない、感じる考古資料館、どうぞ一人一人、好きな方法で楽しんでください。当館が、新しい発見・知識、楽しいこと、面白いこと、の行き交う交差点になれるように頑張ります。

発掘された山形の城館跡

「荒城の月」や「古城」などの歌でも親しまれている城や館の跡は、日本人の心のなかに深く根づいている。中世に人びとが夢を託し、また死闘の場となっていた城館跡は、いまは崩れ落ち草深く埋もれてしまった。それらは軍事的な防御設備のみならず、政治や文化の根城でもあった。県内で発掘調査された城館跡は50近いが、そこから発見される遺物は、中世の歴史を物語るだいたいの資料である。第10回企画展は、城館跡を通して歴史のとびらを開いてみることにした。

堀がめぐる もののふの館

水田や畑地などに、今も堀で囲まれた方形の区画を残しているところがある。堀の内側は、土塁で囲まれていることが多いが、これは大方崩されている。方一町やそれ以下の四・五〇メートルのところもある。

米沢市木和田には北向きの山麓にその跡がはつきり残されている。内部は発掘すれば、堀立柱の建物跡が何棟もあらわれる例が多い。木和田館はそのごく一部が調査されたにすぎないが、洗い場らしい水場の附近から一一世紀から一二世紀にかけての土器片が発掘された。

したがって武士が力を持ち始める平安時代後期から、防御と生活の場をかねそなえた方形居館跡が出現したことを示している。

遊佐町大楯遺跡も数次にわたる発掘が行われ、中国から渡来した青磁・白磁や珠洲・越前などの古陶磁や「かわらけ」（使い捨ての酒器）などが多数出土した。ここは幅三メートルの堀が方形にめぐり、

内部には板塀らしい柵列がまわっていた。一二世紀から一四世紀にかけての遺物が発見され、貴重な木簡などの文字資料もみられる。

これらの方形館跡は、戦国時代にも武将の屋敷跡として存在し、より複雑化していく。やがて大規模な水堀によって三重の堀がめぐるような拠点的な城へ発展していくのである。

城とたたかい

戦乱が打ちつづく南北朝時代以後、武士たちはより堅固で軍事的にも有利な山や丘陵に拠点を設けるようになる。日常生活は、山の近くの平地で営み、いざ戦いという時に山の城を利用したこともある。前者は「根小屋」とよび、後者を「詰の城」ともいう。

このような山城が県内に五〇〇ヶ所以上も分布する。山を削り平坦地を設け、いくつも主郭をとり巻く「帯曲輪」を造った。また横堀をめぐらしたり、斜面と直交して畝状堅堀を掘って上がってくる敵の横移動に備えたのである。戦国時代は、まさに国中で山の土木工事に狂奔した。村人も自分たちで身を守るため

に「村の城」をつくったらしい。

城館と人びとの暮らし

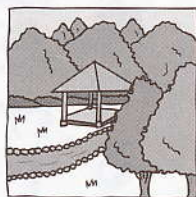
山に設けられた城は、日常生活の場でなかったことが多いため、遺物が出土することは少ない。

居館跡からは、日常の生活に使用された陶磁器や木地物・漆器椀・箸・下駄などの生活用品が多く発見される。展示されている遺物から、中世や戦国期の生活の一端を垣間みることができよう。

有力な武士の居館からは、中国から輸入された青磁・白磁・景德鎮の染付、瀬戸・美濃などの国産陶器も発見されることが多い。

県指定の川西町吉田大坊屋敷や米沢市長手の古瀬戸灰釉瓶子、山形城下出土の黒織部茶碗、鼠志野盤など優品であり、広い交流をものがたる。

呪符木簡・人形・板碑など当時の信仰を示し興味つきなものがある。



▲企画展会場展示風景

講演とシンポジウム

- 日 時／11月17日(土)～18日(日)
午後1時半より
- 会 場／本資料館研修室
- 講 演／山形大学助教授 伊藤清郎氏
- 報告
山口博之(山形) 工藤清泰(青森)
室野秀文(岩手) 福原圭一(新潟) 松岡進(東京)の各氏

赤ちゃんもやってくる

資料館

縄文時代の遺跡からも赤ちゃんの手形や足形を粘土に押しつけた土版が発見される。村山市西海湖遺跡からも手形が出土している。

当時は乳幼児の死亡率が高かったため、親はどれほど心をくだいて赤ちゃんの成長をねがったか。そのあらわれが土版で、子どもを思う気持ちは、いまもむかしも変わらない。

本館でも七・八月の毎土曜・日曜に、子どもの手形・足形をとるよびかけを行った。そ



▲手形とりのお母さんと子ども

の日は、若いお父さんお母さんに抱かれて一〜二才の赤ちゃんがいつも五・六組は訪れる盛況である。もうすでに〇〇組の方々がやってきて、本館の職員の指導で粘土板との格闘をやっている。

九月九日の縄文まつりにおいて一回目の野焼きを行い、引き続き一〇月下旬に二回目を焼き上げる。

盛況だった体験教室

—— 今年の縄文まつり ——

土器づくり、勾玉づくり、編布（あんぎん）教室と、それに火起し、

弓矢体験と今年は体験教室へ参加する小・中学生が大変多かった。

九月九日の縄文まつりの日には、午後から体験教室が行われ、のべ一五〇名の参加者にふくれ上がった。大人



▲編布

の方々も加えみんな真剣なまなざしで、それぞれの制作にいそしんでいた。

これらの指導には本館職員のほかに「うきたむ考古の会」の有志があたり、まつりが始まる夕刻までがんばっている姿がみられた。

午後三時から野外ステージでわりさや憂羅のフラメンコ公演。縄文まつり開幕のころ突然

紅葉の出羽三山史跡を訪ねる

訪ねる 秋の遺跡めぐり

今年の「みる・きく・

ふれる遺跡の旅」は、六月三〇日と七月一日馬頭温泉に一泊していわき市とその周辺の古墳や史跡をめぐった。

春の遺跡めぐりは、六月二日多賀城や東北歴史博物館を見学した。秋の遺跡めぐりは、一〇月一四日行われ、二三名が参加した。紅

の降雨にみまわれ、急ぎよ会場を館内に移し、縄文食試食、

森繁哉氏による現代舞踏、縄文太鼓の演奏が行われ、盛況のうちに終えることができた。今年はい

れまで最大規模ののべ四〇〇名がまつりに参加した。



▲遺跡めぐり（旧大日寺跡にて）

安久津八幡と

浄土庭園

資料館の東五〇〇メートルのところに安久津八幡神社があり、置賜地方で唯一の三重塔が緑の山を背にして立っている。

春の桜や菜の花のころ、特に美しい。安久津八幡は、中世はじめ摂関家荘園であった屋代荘の総鎮守として繁栄した。慈覚大師開創と伝えられる阿弥陀堂を中心に、八幡宮別当寺神宮寺や金蔵院・千殊院など一二坊が



▲浄土庭園があった安久津八幡三重塔附近

堂を連ねていた。長井荘地頭長井氏、伊達氏、蒲生氏、上杉氏などによって代々保護されてきた。

江戸時代後期に描かれたと思われる八幡社蔵の「一山絵図」には、舞楽殿の前が大きな池をなし、三重塔が池の中の島に立っている様子がうかがわれる。

足利市教育委員会の大沢伸啓氏は、毛越寺や白水阿弥陀堂に共通する平安後期に成立をみた浄土庭園があったことを、この度盛岡で開かれた日本考古学協会で発表している。

いまの「三嶋池」がかつてはもっと広く西側へ伸び、三重塔のあたりが中の島をなし、いまの参道が池の中を渡る橋でつながっていたと推定されるのである。旗立石なども池の景石であった可能性がある。

江戸時代に描かれた「安久津一山絵図」に照らしても、充分にその景観がうかがわれる。いわき市の白水阿弥陀堂は、これ

より規模は大きい。三方を山で囲まれ、前面を川が流れる景観は、よく安久津八幡に共通する。これら東北部にみられる浄土庭園の名残りは奥州藤原氏との関連が考えられる。

その目で見ると、寺院の前面に展開される浄土庭園が何となくほうふつと見えてくるようである。ここが平泉に関連深い屋代荘総鎮守であること、延年の舞が伝わっていること、藤原氏の一族の比爪某が高畑城を築いた伝承などもこれを裏書きするようである。いずれ周辺が発掘調査などによってより明らかになることを期待したい。



我が館の展示品⑨

早坂山の板碑

米沢市街より北東五キロ、国道一二号線を栗子へ向かう。左手には八幡原工業団地がひろがるが、旧万世小学校の背後の標高五〇二メートルの山が早坂山で、東西にのびる尾根上にいくつもの曲輪や堀切りが連なる。鷲ヶ城ともよばれ、伊達氏に関する山城跡である。

その西麓の台地が道路にかかるために、一九八九年(平成元)山形県教育委員会によってその一部が発掘調査された。「根小屋」という字名を残す発掘区において土塁跡や道路跡・井戸跡・土坑などが検出された。早坂山館につながる屋敷地と考えられるが、多数の板碑残欠なども発掘された。

いま企画展示室にある三基の板碑もその折出土したものである。高さ七五センチより八八センチ、幅五〇〜三〇センチで、凝灰岩製である。板碑は中世に盛んにつくられた供養塔婆である。頂部を

山型とし、額部が突出しそこに二条線がめぐり、基部も突出して台坐のようになっていく。碑面には主尊の種子を刻み、造立年月日、偈や趣意、造立者名を刻み、地域における中世史の重要な資料となっている。

しかしこの板碑には、刻銘が一切ない。小型の板碑にはこのようなものが多いが、墨書か、主尊をあらわした紙を貼ったことも考えられる。

おそらくこれらの小型板碑は、板碑の小型化が進む一五世紀代のものであろう。現地には、いまも龕殿型双体五輪板碑が立っている。



▲早坂山の板碑